

三三蔵祈雨事

建治元年六月二日 五四歳

夫木をうへ候には、大風ふき候へどもつよきすけをかひぬればたうれず。本より生ひて候木なれども、根の弱きはたうれぬ。甲斐無き者なれども、たすくる者強ければたうれず。すこし健の者も独りなれば悪しきみちにはたうれぬ。又、三千大千世界のなかには舍利弗・迦葉尊者をのぞいては、仏よにいで給はずば、一人もなく三悪道に墮つべかりしが、仏をたのみまいらせし強縁によりて、一切衆生はをほく仏になりしなり。まして阿闍世王・あうくつまらなんど申せし悪人どもは、いかにもかなうまじくて必ず阿鼻地獄に墮つべかりしかども、教主釈尊と申す大人にゆきあわせ給ひてこそ、仏にはならせ給ひしか。されば仏になるみちは善知識にはすぎず。わがち彘なにかせん。たゞあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知識たひせちなり。而るに善知識に値ふ事が第一のかたき事なり。されば仏は善知識に値ふ事をば一眼のかめの浮木に入り、梵天よりいとを下げた大地のはりのめに入るにたとへ給へり。而るに末代悪世には悪知識は大地微塵よりをもほく、善知識は爪上の土よりもすくなし。補陀落山の觀世音菩薩は善財童子の善知識、別・円二教ををしへていまだ純円ならず。常啼菩薩は身をうて善智識をもとめしに、曇無竭菩薩にあへり。通・別・円の三教をならひて法華経ををしへず。舍利弗は金師が善知識、九十日と申せしかば闍提の人となしたりき。ふるなは一夏の説法に大乘の機を小人となす。大聖すら法華経をゆるされず、証果のらん機をしらず。末代悪世の学者等をば此をもつてすひしぬべし。天を地といひ、東を西といひ、火を水とをしへ、星は月にすぐれたり、ありづかは須弥山にこへたりなんど申す人々を信じて候はん人々は、ならわざらん悪人にははるかをとりにあしかりぬべし。

日蓮仏法をこゝろみるに、道理と証文とはすぎず。又道理証文よりも現証にはすぎず。而るに去ぬる文永五年の比、東には俘囚をこり、西には蒙古よりせめつかひつきぬ。日蓮案じて云はく、仏法を信ぜざればなり。定めて調伏をこなわれんずらん。調伏は又真言宗にてぞあらんずらん。月支・漢土・日本三箇国の間に且く月支はをく。漢土・日本の二国は真言宗にやぶらるべし。善無畏三蔵、漢土に亘りてありし時は、唐の玄宗の時なり。大旱魃ありしに祈雨の法ををほせつけられて候ひしに、大雨ふらせて上一人より下万民にいたるまで大いに悦びし程に、須臾ありて大風吹き来たりて国土をふきやぶりしかば、けをさめてありしなり。又、其の世に金剛智三蔵わたる。又雨の御いのりありしかば、七日が内に大雨下り、上のごとく悦んでありし程に前代未聞の大風吹きしかば、真言宗はをそろしき悪法なりとて月支へをわれしが、とかうしてとゞまりぬ。又、同じき御世に不空三蔵雨をいのりし程、三日が内に大雨下る。悦びさきのごとし。又大風吹きてさき二度よりもをびたゞし、数十日とゞまらず。不可思議の事にてありしなり。此は日本国の智者・愚者一人もしらぬ事なり。しらんとをわば、日蓮が生きて

ある時はしくたづねならへ。

日本国には天長元年二月に大旱魃あり。弘法大師も神泉苑にして祈雨あるべきにてありし程に、守敏と申せし人すゝんで云はく、弘法は下臈なり我は上臈なり。まづをほせをかほるべしと申す。こうに随ひて守敏をこなう。七日と申すには大雨下る。しかれども京中計りにて田舎にふらず。弘法にをほせつけられてありしかば、七日にふらず、二七日にふらず、三七日にふらざりしかば、天子我といのりて雨をふらせ給ひき。而るを東寺の門人等、我が師の雨とがうす。くはしくは日記をひいて習ふべし。天下第一のわわくのありなり。これより外に弘仁九年の春のへきれい、又三鉢なげたる事に不可思議の誑惑あり、口伝すべし。

天台大師は陳の世に大旱魃あり、法華經をよみて須臾に雨下る。王臣かうべをかたづけ、万民たなごころをあわせたり。しかも大雨にもあらず風もふかず、甘雨にてありしかば、陳王、大師の御前にをはしまして、内裏へかへらんことをわすれ給ひき。此の時、三度の礼拝はありしなり。

去ぬる弘仁九年の春大旱魃ありき。嵯峨の天王、真綱と申す臣下をもって冬嗣のとり申されしかば、法華經・金光明經・仁王經をもって伝教大師祈雨ありき。三日と申せし日、ほそきくも、ほそきあめしづしづと下りしかば、天子あまりによろこばせ給ひて、日本第一のかたことたりし大乘の戒壇はゆるされしなり。伝教大師の御師、護命と申せし聖人は南都第一の僧なり。四十人の御弟子あひぐして仁王經をもって祈雨ありしが、五日と申せしに雨下りぬ。五日はいみじき事なれども、三日にはをとりて而も雨あらかりしかば、まけにならせ給ひぬ。此をもって弘法の雨をばすひせさせ給ふべし。かく法華經はめでたく、真言はをろかに候に、日本のほろぶべきにや、一向真言にてあるなり。隱岐の法王の事をもってをもうに、真言をもって蒙古とへぞとをでうぶくせば、日本国やまけんずらんとすひせしゆへに、此の事の命を捨てゝいゝてみんとをもひしなり。いゝし時はでしらせいせしかども、いまはあひぬれば心よかるべきにや。漢土・日本の智者五百余年が間、一人もしらぬ事をかんがへて候なり。善無畏・金剛智・不空等の祈雨に雨は下りて而も大風のそひ候は、いかに心へさせ給ふべき。外道の法なれども、いうにかひなき道士の法にも雨下る事あり。まして仏法は小乗なりとも、法のごとく行なふならば、いかでか雨下らざるべき。いわうや大日經は華嚴・般若にこそをよばねども、阿含にはすこしまさりて候ぞかし。いかでかいのらんに雨下らざるべき。されば雨は下りて候へども大風のそいぬるは、大なる僻事のかの法の中にまじわれるなるべし。弘法大師の三七日に雨下らずして候を、天子の雨を我が雨と申すは又善無畏等よりも大いにまさる矢のあるなり。第一の大妄語には弘法大師の自筆に云はく「弘仁九年の春、疫れいをいのりてありしかば、夜中に日いでたり」云云。かゝるそらごとをいう人なり。此の事は日蓮が門家第一の秘事なり。本文をとりつめていうべし。仏法はさてをきぬ。上にかきぬる事天下第一の大事なり。つてにをほせあるべからず。御心ざしのいたりて

候へばをどろかしまいらせ候。日蓮をばいかながあるべかるらんとをぼつかなしとをぼしめすべきゆへにかゝる事も候。むこり国だにもつよくせめ候わば、今生にもひろまる事も候なん。あまりにはげしくあたりし人々は、くゆるへんもやあらんずらん。

外道と申すは仏前八百年よりはじまりて、はじめは二天三仙にてありしが、やうやくわかれて九十五種なり。其の中に多くの智者神通のものありしかども、一人も生死をはなれず。又帰依せし人々も善につけ悪につけて皆三悪道に墮ち候ひしを、仏出世せさせ給ひてありしかば、九十五種の外道、十六大国の王臣諸民をかたらひて、或はのり、或はうち、或は弟子、或はだんな等無量無辺ころせしかども仏たゆむ心なし。我此の法門を諸人にをどされていゝやむほどならば、一切衆生地獄に墮つべしとつよくなげかせ給ひしゆへに退する心なし。この外道と申すは先仏の経々を見てよみそこなひて候ひしより事起をこれり。

今も又かくのごとし。日本の法門多しといへども源は八宗・九宗・十宗よりをこれり。十宗のなかに華嚴等の宗々はさてをきぬ。真言と天台との勝劣に、弘法・慈覚・智証のまどひしによりて、日本国の人々、今生には他国にもせめられ、後生にも悪道に墮つるなり。漢土のほろび、又悪道に墮つる事も、善無畏・金剛智・不空のあやまりよりはじまれり。又天台宗の人々も慈覚・智証より後は、かの人々の智慧にせかれて天台宗のごとくならず。さればさのみやわあるべき。いわうや日蓮はかれにすぐべきとはわが弟子等をばせども、仏の記文にはたがわず、末法に入って仏法をばうじて無間地獄に墮つべきものは大地微塵よりも多く、正法をへたらん人は爪上の土よりもすくなしと涅槃經にはとかれ、法華經には設ひ須弥山をなぐるものはありとも、我が末法に法華經を経のごとくにとく者ありがたしと記しをかせ給へり。大集經・金光明經・仁王經・守護經・般泥洹經・最勝王經等に、末法に入って正法を行ぜん人出来せば、邪法のもの王臣等にうたへてあらんほどに、彼の王臣等、他人がことばにつひて一人の正法のもを、或はのり、或はせめ、或はながし、或はころさば、梵王・帝釈・無量の諸天、天神・地神等、りんごくの賢王の身に入りかわりて、その国をほろぼすべしと記し給へり。今の世は似て候者かな。

抑 各々はいかなる宿善にて日蓮をば訪はせ給へるぞ。能く能く過去を御尋ね有らば、なにと無くとも此の度生死は離れさせ給ふべし。すりはむどくは三箇年に十四字を暗にせざりしかども仏に成りぬ。提婆は六万蔵を暗にして無間に墮ちぬ。是偏に末代の今の世を表するなり。敢へて人の上と思し食すべからず。事繁ければ止め置き候ひ了んぬ。抑当時の忽々に御志申す計り候はねば、大事の事あらあらおどろかしまいらせ候。さゝげ・青大豆給ひ候ひぬ。

六月二十二日

日蓮花押

西山殿御返事